

《博士論文要旨および審査報告》

濱口恵子 *Non-European Women in Chaucer: A Postcolonial Study*

——チョーサーにおける非西洋の女性——ポストコロニアル研究——

学位請求論文

I 論文要旨

濱口恵子

二〇〇〇年に *Jeffery Jerome Cohen* が画期的な論文集 *The Postcolonial Middle Ages* を上梓して以来、近年、中世英文学のポストコロニアル研究がこれまでにない活況を呈している。しかし、上掲の *Cohen* 編著の論文集 *The Postcolonial Middle Ages* をも含めて、非西洋の女性の表象はいまだ十分な議論がなされていない。本論の目的は、ポストコロニアル研究を援用して、チョーサーがどのような、ジェンダー、文化、宗教の他者である非西洋の女性を表しているのかを探索することである。

Chapter One: Introduction では、どうしてチョーサーの作品における非西洋の女性というテーマおよびポストコロニアル研究という方法を選んだのかを述べる。非西洋の

女性の研究に従来のフェミニスト批評だけではなく、なぜポストコロニアル批評を加えなければならないのかも説明する。ポストコロニアル研究の発端となった著書 *Orientalism* (1987) の著者 *Edward Said*、それに続く代表的なポストコロニアル理論家 *Homi K. Bhabha*, *Frantz Fanon*, *Bentia Parry*, *Gayatri Chakravorty Spivak*, *Mih-n-ha Trinh* などのポストコロニアル理論を紹介する。ポストコロニアル理論を援用してのチョーサー研究にあたり、チョーサーの立場をどうとらえるかも考察する。

Chapter Two: The resistance of the Syrian mother-in-law in the *Man of the Law's Tale* では、Syria の *North-umberland* の表象を比較するにより the *Man of Law* の the *Orient* (Syria) に対するアンビヴァレントな態度について論じる。the *Man of Law* がもつた negative なオリエンタリズムを抱いているという従来の説にたいして、

先行研究では見過ごされてきた the English mother-in-law についての描写を検討することにより、疑問を投げかける。彼の言説はその時代の主要なイデオロギーに制約されているというより、むしろ発話の途中 *slippage* が生じ、他者の声が紛れ込んでしまいアンビヴァレントになっている。

Chapter Three: Canacee's problematic marriage in the *Squire's Tale* は、Canacee や Cambalo の近親婚について、近親婚への不安から話の途中で口をはらむ the Franklin の中断について考察する。本章では、The Squire は Canacee と両親を同じくする兄、full-brother との結婚について語っているという定説に異を唱える。モンゴルの結婚の風習に関する中世のオリエンタリスト達の記録を辿ることにより、the Squire はモンゴルの風習とおり、Canacee と異母兄、half-brother との結婚を指しているという可能性を提示する。モンゴルの風習を無邪気に語る the Squire に対して、the Franklin は近親婚への危惧を覚え、中断に入る。近親婚への不安が中断の理由であるというのは定説であるが、falcon のエピソードは無視されてきた。この falcon エピソードに注意を向けることにより、Canacee という名前の連想と falcon エピソードがどのように結びついて近親婚への危惧に至ったかを追求する。チャョーサーはふたりのカンタベリ巡礼、the Squire と the

Franklinを通じて、モンローの世界に対する異なる態度。オリエンタリズムのアンビヴァレントな側面を示している。

Chapter Four : The colonization of Dido in the *House of Fame* and the Legend of Good Women

「*the House of Fame*」は、Dido について Jane Eyre and Wide Sargasso Sea について Spivak によるポストコロニアル批評を援用して、どのようにコロニアルな主体 Dido の声が聞こえてくるかを探索する。The *House of Fame* についての前半の部分 4.1. Dido's accusation of Virgil and Aeneas in the *House of Fame* は、Dido の “For thirgh yow is my name lorn” (三四六) の非難と嘆きの言葉に焦点をあてて、貞節の誉れ高い Dido になされた Virgil による epistemic violence を取りあげる。チョーサーは、「Virgil が貞節な Dido の名声を汚した」として Virgil 批判を知っている。The *House of Fame* の中で、Dido は Aeneas だけでなく Virgil を同時に攻撃させて、彼女の名声を貶めた責任を暗示しているのではないかと考察。“fame” という語に内包される曖昧な意味が、他社の表象の信憑性への疑いに結び付けられている。後半の the Legend of Good Women についての 4.2. Colonizing Dido in the Legend of Good Women のように、the *House of Fame* では省略された Aeneas による Dido と Carthage の植民地化のプロセスに焦点をあてる。どのようにして外国人である Aeneas とその部下た

ちが、漂着地 Carthage とその女王 Dido をしだいに占領し、支配し、見捨てていくかを、一四世紀の歴史的背景と照らしながら考察する。Anne/Alceste の要請でチョーサー / Legend の語り手は女性の視点から語る。しかし、Dido につけられた “sely” という epithet に内包される重層的な意味からチョーサーの複雑でアマゾン・ヴァレントな態度が垣間見られる。

Chapter Five: Domesticating Amazons in the *Knight's Tale* では、Homi K. Bhabha の mimicry と slippage, Frantz Fanon の mask と camouflage の理論に基づいて the *Knight's Tale* の中で the Knight と Theseus がいかにアマゾンの女性の過去を隠蔽し、元アマゾンの女性達を “mimic Western civilized women” に仕立て上げることに腐心するか検討していく。彼らの “domestication of Amazons” アゾンの女性の教化は、Hippolyta の場合は、表面的には colonizer の規範に従おうという彼女の意志のため、比較的容易になされたかにみえる。一方彼女のほうでは西洋女性の模範的な振る舞いの模倣 (mimicry) を通して、抵抗や転覆を密かに試みる。Theseus と the Knight も Emelye の教化については難渋をさわめる。Emelye を結婚の制度に嵌めこむことにより覇権を狙う Theseus の思惑は、その過程で slippage が生じ、頓挫する。同様に語り手 the Knight は、西洋のロマンスのヒロインの仮面

(Mask) の下から Emelye のアマゾンの女性というアイデンティティを暴露してしまう。一四世紀の十字軍による他者の支配や教化がいかに困難極まりない使命であったかを反映している。

Chapter Six: Transgressing the borderline of gender: Zenobia in the *Monk's Tale* では、何故 the Monk が Zenobia を罰したのか、また、何故彼女が Orient の女性なのかを検討する。教会の一員として the Monk は、服装や道具などの外側から見えるサインによって明示されない限りジェンダーの境界が曖昧であることに不安を抱いていた。そのため、キリスト教の教義にしたがって the Monk は男装の Zenobia に軍事の用の兜 (helmet) のかわりに女性の被り物 (headdress) をかぶり、しゃく (scepter) のかわりに糸巻き棒 (distaff) を持つことを強要することで罰する。the Monk が Zenobia に与えた罰は、彼自身の属する修道院をも含む教会側の制度が内包する混乱や歪への不安の裏返しでもある。The Monk は Orient が相対主義 (relativism) の地域であり、そこでは多分、ジェンダーの境界を越えることは、不問に付され、罰も下されなと思っています。しかしながら、異教徒の Orient の相対主義はヨーロッパのキリスト教の絶対主義により矯正されなければならぬ。Orient の女性によるジェンダーの境界侵犯は教会の土台を揺るがしかねない脅威であり、その種は

根絶しておく必要があるのである。

Chapter Seven : Conclusion 他者に対するチョーサーの表象は植民地の支配者のイデオロギーの影響をうけ、ネガティブであるというのが従来の代表的見解であった。しかしポストコロニアル研究による本論が示す結果は、チョーサーの他者の表象は複雑でアンビヴァレントであるというものだった。ジェンダー、文化、宗教上の他者の視点からチョーサーの作品を読み直してみると、作品に浮かび上がってくるのは非西洋の女性についての異種混雑性、多様な見解、複雑でアンビヴァレントな表象である。これは、軍人、外交官、税関官吏、宮廷人などとして様々な公務を担い、そして且つ詩人であった作者自身の複雑な立場に起因し、また、一四世紀という時代の複雑な歴史背景や態度を反映している。十字軍は植民地主義の始まりでもあった。中世後期の英国は異教徒の土地獲得にフランスとしのぎをけずり、現地で他者を克服、支配していた。チョーサー自身もバトロン John of Gaunt などに仕える宮廷人として、植民地主義支配者の立場と無縁ではなかった。しかし一方で、チョーサーは、フランスやラテンの文化や文学の影響下、脱植民地化を密かに狙い、低い英語の地位を向上させようとする。まさにポストコロニアルライターである。この複雑な立場から、矛盾する声が交錯し、複雑でアンビヴァレントな表象が生まれるのである。中世英文学のポストコ

ロニアル研究の今後の展望として、非西洋の資料を発掘し、また非西洋の視点から読み直しを行うことによって、従来の西洋中心主義的研究では見えてこなかった部分に光を当てることのできるのではないだろうか。本論での試みはそのささやかな一歩にすぎない。

## Ⅱ 審査報告

### 審査委員

(主査)

専修大学文学部教授 松下 知紀  
 専修大学文学部教授 末廣 幹  
 駒澤大学文学部教授 河崎 征俊

審査委員会は、提出された本論文を(1)問題関心と研究の先進性、(2)論文構成の説得性と研究の到達点、(3)文献収集の広範さと実証性、(4)将来展望の観点から審査した。また、口述試験において、直接、申請者本人より上述の審査点について判断材料を得た。

### 1. 問題関心と本研究の先進性

Orient という異文化 (異なる習慣・宗教) との邂逅は詩人 Chaucer の魂にどのように訴えたのだろうか。その声を詩人は作品にどのように書き留められていたのだろうか。それが濱口氏の関心事であり、ポストコロニアル理論に依拠して具体的に且つ明確に結論を提示したのが著者の先進性である。

イギリス詩の父 Geoffrey Chaucer の作品のうち、西洋の女性を扱った作品が存在する反面、西洋以外の女性 (以

下、非西洋女性) を扱った作品が存在する。例えば、『The Canterbury Tales』の中の『The Man of the Law's Tale, The Squire's Tale & The Knights Tale』、『The Monk's Tale (Zenobia の物語)』、『やうに』、『The House of Fame』、『The Legend of Good Women (Dido の物語)』などがその分類に当てはまる。これらの作品において、Chaucer がどのように非西洋女性たちを記述しているかをポストコロニアル研究の立場から検証することによって、従来の中世英文学研究では提示され得なかった側面を如実に描き出すことを可能にしている。これらの作品は西洋古典作家の Virgil や Ovid、イタリアの中世作家の Boccaccio の *De mulieribus clartis* (Famous Women) などに依拠して書かれているが、濱口氏は原典と Chaucer 作品を対比させることにより、非西洋女性についての作品の内部構造と相違を明らかに提示し、Chaucer の生きた時代背景が西洋の内部だけに閉ざされた社会ではなくなり、彼ら人間観が西洋の単一的な価値観だけでなく、非西洋の相対的な価値観をも抱合した複合的な価値観であったと指摘する。

Chaucer の全体像を理解するためには、核を形成する作品群に加えて周辺部と見なされながらも、核作品と本質的に呼応する作品群にも焦点を当て研究を進める必要があるが、濱口氏はこのような視点から詩人 Chaucer の全体像を本質的に問題を深化して把握することに努めている。

2. 論文構成の説得性と研究目的の到達点について

本論文は Chapter One の Introduction から Chapter Seven の Conclusion までの本論部分 Chapter Two から Chapter Six までの七章から成り立っている。

Chapter One : Introduction

Chapter Two : The resistance of the Syrian mother-in-law in the *Man of the Law's Tale*

Chapter Three : Canacee's problematic marriage in the

*Squire's Tale*

Chapter Four : The colonization of Dido

4.1. Dido's accusation of Virgil and Aeneas in the *House of Fame*

4.2. Colonizing Dido in the *Legend of Good Women*

Chapter Five : Domesticating Amazons in the *Knight's Tale*

Chapter Six : Transgressing the borderline of gender :

*Zenobia in the Monk's Tale*

Chapter One

濱口氏は、Chaucer の作品研究にポストコロニアル理論を援用して、従来の分析において明確にできなかった「非西洋」女性の位置づけが作品中にできると主張する。

Jeffery Jerome Cohen (2000) *The Postcolonial Middle Ages*, Edward Said (1978) *Orientalism*, Homi K. Bhabha (1984) 'Of mimicry and man', Frantz Fanon (1952) *Peau Noir, Masque Blanc (Black Skin, White Mask)* などの学説を紹介し、これらの研究を手掛かりとして中世英文学の作品研究を進める意義を述べている。

Chapter Two

*The Man of Law's Tale* 「法律家の話」は Constance (ローエ皇帝の娘) が異教徒シリアの嫁ぎ先で異教徒 Syrian mother-in-law に迫害された後、逃れたイギリス (Northumberland) の English mother-in-law にも迫害されるが、その後ローエへ戻り幸福に暮らすという物語である。濱口氏は Trivet と Gower の種本と Chaucer の物語を比較して相違を明らかにする。従来の研究にも Orient (Syria) について言及に加えて、著者は English mother-in-law にも焦点を当て、Chaucer による Constance の描写に異文化との遭遇、国際結婚の諸問題、異教徒義母への軋轢などの「他者性 (Otherness)」を認め、作品中に slippage (矛盾する亀裂) や ambivalence (あいまい性) が存在することを Bhabha の立場を支持して指摘する。このような場面を捉えるには、ポストコロニアル理論が広範に適用できると著者は主張する。

Chapter Three

*The Squire's Tale* 「騎士見習の話」では Canacee (ジーンキス・カンの娘) の異母兄 Cambaloo との結婚話が紹介されている。キリスト教徒の絶対主義的立場の Franklin (郷土) は危惧を感じるモンゴルの風習・文化 (鷹のエピソード、近親婚、宴会、剣の効力など) について、相対主義的立場に立つ騎士見習と対立を生じている。濱口氏は Chaucer が Orient 世界を受容する精神性を展開しているとして、<sup>7</sup> Said の Orientalism に依拠してこの作品を分析し、ポストコロニアル理論が適切であると主張する。

#### Chapter Four

4.1. *The House of Fame* 「名声の館」では、貞節の誉れ高い Dido (非西洋女性) が Aeneas によって名声を汚された物語が示される。作者 Virgil によっても Dido が汚名を受けたように Chaucer が暗示していると指摘し、<sup>8</sup> “fame” という語には「名声」と同時に「汚名」も含まれることを挙げ、内包する意味のあいまい性が存在すると主張する。濱口氏は Chaucer の言説には「他者の表象」に信憑性への疑いが示されていると指摘し、<sup>9</sup> Ovid と Virgil の種本を比較検討して、Chaucer には Dido に対する episodic violence (事実を歪めた記述) が存在するとして、ポストコロニアルな立場から分析を行っている。

4.2. また、*The Legend of Good Women* 「善女列伝」では Aeneas (外国人) がカルタゴの女王 Dido とその都市

を植民地化する過程に焦点が当てられて書かれているが、Aeneas が次第に Dido を占領し、支配し、見捨てる様子を、濱口氏は一四世紀の歴史的背景と照らして考察している。Dido に対して用いられている “sely” という表現には「幸福な」と「愚かな」といった重層的な意味を含むので、Chaucer の態度は複雑で、アンビヴァレントであると著者は指摘する。さらに、Chaucer には植民化された女性の歎きというポストコロニアルの特徴が現れていると主張する。

#### Chapter Five

*The Knight's Tale* 「騎士の話」は *The Canterbury Tales* を代表する物語であるが、アテネの公爵 Theseus が女人国の女王 Hippolyta とその妹 Emelye を引き連れて祖国へ戻り、やがてテーベの貴族 Arcite と Palamon を捕虜とし、その後、Emelye をめぐって二人の貴族が争い、槍試合で勝利した Arcite が落馬して死ぬと、<sup>10</sup> Theseus の計らいで Emelye が Palamon に嫁ぎという物語である。濱口氏は Boccaccio と Statius の種本と Chaucer の作品を比較検討し、Chaucer の「騎士の話」に見られるアマゾネスの分析を綿密に行っている。

Bhabha の mimicry (模倣) と slippage や Fanon の mask camouflage の理論に基づいて、<sup>11</sup> 著者は元アマゾン女性の隠蔽された過去が、西洋女性の模範的振る舞いを模

倣して、抵抗や転覆を密かに試みる様子を具体的に提示し、『騎士の話』の興味深い内奥をポストコロニアル理論の援用によって解明している。その意味で、本章は極めて質の高い章として評価できる。

#### Chapter Six

*The Monk's Tale* 『修道士の話』は、女王 Zenobia (Orient) が男装した軍服用兜 (helmet) を女性用被り物 (headdress) に、杓 (scepter) を糸巻き棒 (distaff) に換えることを強要される物語である。修道士が Zenobia の服装・道具の点からジェンダーの境界があいまいであることに不安を抱き、キリスト教の絶対主義的教義にしたがって罰するが、濱口氏は、従来研究されて来なかった Zenobia についてのジェンダー越境や男装を Orient の相対主義の視点から考察し、Orient で許容されたジェンダーの越境をポストコロニアル理論の立場から捉えている。

#### Chapter Seven

従来の研究では、Chaucer は「他者 (Otherness)」を否定的に表現しているという見解が示されて来たが、ポストコロニアル研究の立場から、ジェンダー、文化ならびに宗教上の「他者」を考察すると、Chaucer が非西洋の女性を異種混交、見解の多様性、複雑でアンビヴァレントな表現をしている、と濱口氏は指摘する。この原因として、著者は Chaucer が外交官、税関官吏、宮廷人という公的な

立場にあったことと同時に詩人としての私的な立場にあったことを挙げ、その結果、詩人は当時のフランス、イタリアの文化・文学の強い影響を受けて、イギリスの脱植民地化と英語の地位の向上を意図した、ポストコロニアル詩人になったのではないかと結論づけている。

濱口氏は、Chaucer の諸作品に見られるポストコロニアル的表象を独自の視点で纏めており、本論文に説得力を持たせている。以上の点から、本論文で意図した研究目的は十分に達成されていると考える。

#### 3. 文献収集の広範さと実証性について

参考文献には五〇〇以上の書物・論文が掲載されていることから明らかなとおり、濱口氏が Chaucer の主要作品とそれらに関連する中世英文学諸作品を丹念に読み、種本として取り上げられた、中世ラテン文学の Virgil, Ovid、および中世イタリア文学の Boccaccio などの作品と詳細に照合して、種本と Chaucer 作品の差異を詳細に検証していることは確かである。これらの実証的資料をポストコロニアル理論の視点から検討し、Chaucer の諸作品が Orient を内包する複合的西洋から創作されたと考察している点も評価される。異なる文化や宗教を維持する人々との交流を的確に捉えることにより、文学作品に新鮮さが加味されるとする著者の主張も十分頷ける。



## 4. 研究の展望

三委員の見解は濱口氏の著書が極めて優れた論考を含んでいることで一致した。そして、ポストコロニアル理論を他の中世英文学の諸作品に適用すれば、大きな将来性をもつことが指摘された。しかし、次の三点が問題点として指摘される。

(1) 非西洋女性の記述にポストコロニアル理論に依存しすぎる部分があるので、作品の細部から読み取れる実証性を大切にしたいほうがよい。

(2) Chaucer のパーソナリティー（人間性）に関する研究を加えて、詩人の全体像を捉える必要がある。

(3) 筆者は Loeb 版などの中世ラテン文学作品や中世イタリヤ文学作品を原語で検証しているが、著書には英語訳しか与えられていない。正確を期するためには紙面の制約が大きいとしても原語での提示が必要である。

## 5. 口頭試問について

末廣、河崎、松下の三委員によって行われた。三委員からの全般的質問と個別的質問に対して、本論文提出者は適切かつ明快に答え、十分に対応したと判断された。以上

## III 学位授与要記

一、氏名・本籍 濱口恵子（大阪府）

二、学位の種類 博士（文学）

三、学位記番号 文乙第六号

四、学位授与の条件 学位規則第四条第二項該当

五、学位授与年月日 平成十九年三月二十八日

六、学位論文題目 *Non-European Women in Chaucer: A Postcolonial Study*

## 七、審査委員

主査 専修大学文学部教授 松下 知紀

副査 専修大学文学部教授 末廣 幹

副査 駒澤大学文学部教授 河崎 征俊